



名古屋柳城短期大学

ちやべるにゅーす

第12号 クリスマス特集

2006年12月20日

皆さん先日、九州の聖公会・菊池黎明教会で働いておられる太田國男先生から、ハンセン病のお話をお聞きになったことと思います。ハンセン病について初めて知った方、関心をもってこれまで学んでいた方、様々な皆さんに深刻なまた清心なお話がなされたことでしょう。ひょっとしてダブルかもしれませんが、私の思い出をお話してみたいと思います。

* * *

柳城学院の基となっているキリスト教は日本聖公会といって、全国を11のブロック（教区）に分けています。柳城は中部教区でしたね。太田先生は元々は北関東教区でした。その教区は群馬・栃木・茨城・埼玉の4県から成り、太田先生は群馬県草津町にあるハンセン病の人を収容する広大な山林内楽泉園におられたので北関東教区でした。実は私も埼玉県出身で同教区に属していたのです。私の、高校・大学時代は日本聖公会中、青年会活動が盛んで、青年たちがよく楽泉園に行き、交換会をもちました。その先輩グループに若き太田先生がおり、「森君」「太田さん」と呼びあっていました。

* * *

そのようなわけで、よく草津に行きました。草津には町の方に草津聖バルナバ教会があり、当時は松村栄司祭が住んでおられ、同時に楽泉園内の聖慰主教会の責任をもっておられたのです。ハンセン病について大体の知識は同司祭から与えられました。プロミンという大変よく効く薬が出て少し経った頃でした。「何しろあの人たちはとても明るいね。それが救いだ。」（松村師）本当にそうでした。畳敷きの聖慰主

教会で100人位のハンセン病の人たちとミサをささげ、終了した後、丸く座り直します。冗談を言い合ったり、大声で笑いあったりして何しろ明るいのです。目の見えない人、耳の聞こえない人、指がなくなり手の甲の後側を使っておにぎりを食べる人、笑いが絶えません。この明るさはどこから来るのか、信仰のおかげかもしれません。

* * *

楽泉園では多くの人々がおられましたので芸術活動も盛んでした。ハンセン病は指とか目、鼻とか口、他突起している部分がくずれます。目が見えない人は点字の本を読みます。でもその指がくずれ感触がなくなっていますので今度は舌で点字を読んでいます。—このことは少し前にお話しましたね。—すると点字の“点”によって舌が傷つき血が本ににじみます。しかし、本を読みたいとの気持おさえがなく、そのまま舌をすべらせていきます。これも「舌読」ということも以前お話しました。金夏目氏より頂いた歌集『無窮花』の中の3つをご紹介します。

ぜつ 舌 読

森 紀旦

- われに初めて君より点字の手紙来ぬ
二日かかりて舌で読み了る。
- 点字読みて舌の疲れしとき舐めよと
君の送りくれしこのバター飴
- 通信にて苦心して学びし朝鮮語の点字
生かしたし祖国にゆきて

* * *

プロミンによって治り、無菌者になった人がたくさんおられます。私たちとの交わりがこれから広がっていくのでしょうか。

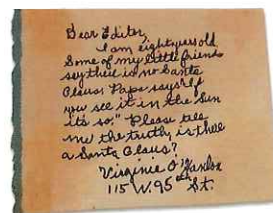
サンタクロースって、いるんでしょうか？

—世界でいちばん有名な社説のおはなし—

今から100年以上前、1897年に、アメリカの「The Sun」という新聞に以下のような社説が載りました。新聞社宛に手紙を書いたのは当時8歳のヴァージニア・オハンロンという女の子で、これに社説の形で返事を書いたのはフランス・ファーセラス・チャーチというベテランの記者でした。この社説は、世界で最も繰り返し印刷された社説と言われており、100年以上経った現在でも、毎年クリスマスシーズンになるとこれを読むという人が世界中にたくさんいます。すでに日本語訳もたくさんありますが、今回はなるべく原文の深さに触れていただけるように、大人向けに訳してみました。(興味ある方のために、原文も添えておきます。こちらもぜひどうぞ。)

ところで、このヴァージニアという女の子が、どんな大人に成長したか興味ありませんか？そういう方のために、以下の本を紹介します。本学図書館にもあります。

村上ゆみ子『サンタの友だちバージニア』偕成社、1994



ヴァージニアが書いた
オリジナルの手紙

(www.pbs.org/wgbh/pages/roadshow/appraiseit/より)

本紙は、以下のすばらしい投書にお答えすることを光栄とすると共に、このような素晴らしい読者を持つことに深い喜びを表明するものであります。

We take pleasure in answering at once and thus prominently the communication below, expressing at the same time our great gratification that its faithful author is numbered among the friends of The Sun:

「しんぶんきしゃさんへ。わたしは8さいです。

ともだちで、サンタクロースはいないという子がいます。

パパは、サンしんぶんにのってるとおりにぞとおもうよ、といいます。

ほんとうのことをおしえてください。サンタクロースはいるのですか？

ヴァージニア・オハンロン

西95番街115」

"DEAR EDITOR: I am 8 years old.

"Some of my little friends say there is no Santa Claus.

"Papa says, 'If you see it in THE SUN it's so.'

"Please tell me the truth; is there a Santa Claus?"

"VIRGINIA O'HANLON.

"115 WEST NINETY-FIFTH STREET."

ヴァージニアさん、それはお友だちのほうがちがっています。何でもうたがってかかる時代の、うたがいの虫にとりつかれているのです。そういう子は、見たものしか信じようとしません。自分の小さな頭でわからないことなんかないと思っているのです。でもね、ヴァージニアさん、大人でも子どもでも、頭でわかることなんてものはほんの少しなのです。頭で考えることと言うならば、この広い宇宙の中の一人の人間なんて、その人を取り巻く無限の世界にくらべれば、そしてすべての真理と知識をつかむことのできる存在から見れば、ただの虫、一匹のアリみたいなものです。

VIRGINIA, your little friends are wrong. They have been affected by the skepticism of a skeptical age. They do not believe except [what] they see. They think that nothing can be which is not comprehensible by their little minds. All minds, Virginia, whether they be men's or children's, are little. In this great universe of ours man is a mere insect, an ant, in his intellect, as compared with the boundless world about him, as measure by the intelligence capable of grasping the whole of truth and knowledge.

そうです、ヴァージニアさん。サンタクロースはいるのです。愛や思いやりやいつくしみが確かにあるように、サンタクロースも確かにいますし、こういうものがたくさんあって、あなたの毎日を美しく、楽しくしてくれていることがおわかりでしょう？サンタクロースがいなかったら、この世の中はどんなにさびしく、つまらないことでしょう。ヴァージニアという名前の子どもたちがこの世にいないのと同じくらい、さびしいことに違いありません。そうして、子どもらしく人を信じることもなくなり、生きることを楽しくしてくれている、詩をうたう心やわくわくする物語もなくなってしまうでしょう。そんな世界では、見たりさわったりできるものしか、楽しみはなくなってしまうはず。世界を満たしている子どもらしさという輝きも、消えてしまうでしょう。

Yes, VIRGINIA, there is a Santa Claus. He exists certainly as love and generosity and devotion exist, and you know that they abound and give to your life its highest beauty and joy. Alas! How dreary would be the world if there were no Santa Claus! It would be as dreary as if there were no VIRGINIAS. There would be no childlike faith then, no poetry, no romance to make tolerable this existence. We should have no enjoyment, except in sense and sight. The eternal light which childhood fills the world would be extinguished.

サンタクロースが信じられないなんて！だとしたら、妖精も信じないんですね。そして、パパに頼んでサンタクロースをつかまえる人をやとって、クリスマスイブに全部の煙突をみはらせるのでしょうか。でも、その人たちがサンタクロースのおりてしてくるところを見なかったからといって、それが何の証拠になるのでしょうか？サンタクロースは誰の目にも見えませんが、それはサンタクロースがいらないというしるしにはならないのです。この世の中で一番ほんとうのこととは、子どもも、大人も、見るができないものなのです。芝生の上で踊りを踊る妖精を見たことがありますか？ないですよ。でも、それは妖精がいらないということにはなりません。この世で誰も見たことがないもの、人の目には見えないものを、すべて知ることができ、想像することができる人など、誰一人いないのです。

Not believe in Santa Claus! You might as well not believe in fairies! You might get your papa to hire men to watch in all the chimneys on Christmas Eve to catch Santa Claus, but even if they did not see Santa Claus coming down, what would that prove? Nobody sees Santa Claus, but that is no sign that there is no Santa Claus. The most real things in the world are those that neither children nor men can see. Did you ever see fairies dancing on the lawn? Of course not, but that's no proof that they are not there. Nobody can conceive or imagine all the wonders there are unseen and unseeable in the world.

赤ちゃんのガラガラをこじあけて、何が音を立てているかを見ることはできます。しかし、どんなに強い人でも、また今まででいちばん強い人がみんなてたばになってかかっても、見えない世界をおおっているものは決してこじ開けることができません。信じる心、想像する心、詩をうたう心、愛する心、物語を楽しむ心、こういう心だけがそのカーテンを開け、その向こうにある天上の美しさや輝きを見ることができるのです。これはほんとうかって？ヴァージニアさん、これよりほんとうで、変わらないことなどこの世界にありません。サンタクロースがいらないだなんて！ありがたいことに、サンタクロースは生きていて、しかも永遠に生きています。これから千年後も、いや1万年を10倍した後にも、サンタクロースは子どもたちの心を楽しくし続けていることでしょう。

You tear apart the baby's rattle and see what makes the noise inside, but there is a veil covering the unseen world which not the strongest man, nor even the united strength of all the strongest man that ever lived, could tear apart. Only faith, fancy, poetry, love, romance can push aside that curtain and view and picture the supernal beauty and glory beyond. Is it all real? Ah, VIRGINIA, in all this world there is nothing else real and abiding. No Santa Claus! Thank GOD! He lives, and he lives forever. A thousand years from now, nay, ten times ten thousand years from now, he will continue to make glad the heart of childhood.

(訳：市原)

合同礼拝

太田國男先生講演

10月11日

先生は、10歳でハンセン病を発病し、以来60年以上の長い年月、国の強制隔離政策のもと、いわれない差別・偏見の中に生き、現在も故郷に帰れないままでおられます。しかし、先生はとても明るく、いろいろなことにチャレンジされています。全国各地で講演されている先生ですが、私たちの心に深く残るお話をしてくださいました。



今日は先ほど読んでいただいた聖書（マタイ16：24-27）の言葉から、『自分の十字架を背負って』というタイトルでお話することになりました。『自分の十字架を背負って』というのは、私が今度作った本のタイトルでもあります。私の「自分の十字架」というのは、私が受けてきた偏見と差別ですね。一番大変なのは後遺症ではないんです。どんなに不自由になっても、そのことよりも周囲から受けた偏見と差別が私達を苦しめている。このハンセン病を患ったことによって受けた偏見と差別、やっぱりこれは言葉には尽くせない。だからそれは本の中に書きました。私のことをもっと知りたいという方は、読んでいただければ有り難いと思っています。

私が療養所に入所したのは14歳から15歳になる2月で、群馬県の有名な草津温泉のそばにある栗生楽泉園というところに入りました。山の中にあり、冬はマイナス17度から20度まで下がるようなところですよ。実は私の家の長男である一番上の兄が、すでにハンセン病でその草津の療養所に入っていたのですが、昭和21（1946）年の2月の初めに、その兄が危篤状態と電報が来て、家族が大騒ぎになった。ところで、私もすでにハンセン病を発症して後遺症も少し出てきているので、父親が私を連れてその草津の療養所に行くことになった。第二次世界大戦が終わった翌年で、世の中はまだまだ荒廃していました。ぎゅうぎゅう詰めのSL汽車に乗って、名古屋から

夜行で出発し何回か乗り換えて、ようやく夜になって草津に着きました。

療養所というのは、一軒を六畳間で4、5部屋に仕切った長屋がたくさん並んでいるようなところでした。その一室に長男が危篤状態で寝てるところへ行っただけです。で、父親はその危篤状態の兄貴を見舞って、末っ子の國男がまた病気になっちゃったから今日連れて来た。よろしく頼む、面倒見てやってくれと死にかかっている兄貴に頼んで帰っちゃう。で、私は残されて、その兄貴と兄貴の嫁さんと3人で、その六畳の部屋で寝るわけですよ。その時にその長男が私に言うんです。私の名は國男ですけど、「國、國、今夜一緒に寝てくれ」って。しかしね、私の兄、兄弟で長男だと言うけど、私を小さい時にお守りをしてくれたと言うけれども、その兄貴の顔見てたら怖くてですね、とても「うん」て返事ができない。死ぬ直前の状態ですから、臭いも出てきている、目は開けられない、頭の毛は抜けている。もう見るからに怖い。どうしてその死にかかっている人の床の中に入って寝れるか。とても寝れなかった。だけでも兄弟だから、「兄さん怖いからやだ」とは言えません。子どもであっても困りました。それで、一昼夜かけて名古屋からここまで来て、夜汽車で疲れきっているというのを理由にして、「明日寝てやるから」「あ、そうか、疲れてきたんだなあ。じゃあ明日楽しみにしてる。」で、その次の日の晩。「今夜寝てくれるか?」「いやあ、まだだめだ。」こうやって明日、明日と延ばしてたら、たぶん死ぬでしょうというようなことです。こりゃショックだったですよ。入所して最初の出来事がそれでした。そして私はそれを兄さんが死んでから後悔しました。いくら怖かったとしても、血の繋がった兄弟ですよ。その兄弟が死の床から私と一緒に寝たいと言ってねだっているのに応えてやれなかった。そのことが後で大きく私にね、のし掛かるようになりました。しかしその時はそんなことを考える余裕もなく、療養所の中での生活が始まっていきました。

その当時、昭和21年（1946年）ころの療養所には自殺する人が多かった。重症の人が多かったし、医薬品もろくに無いし、看護婦さんたちも言い訳にいくくらいの療養所で、生活も大変でした。もう生きてても何の望みも

ないですよ。だから自殺者が多かった。私も、だんだんと療養所の中の友達ができ、自分の病気のことを忘れて療養所の生活に慣れていきますけれども、しかしその、私と同じような年齢の友達が自殺しました。その人は、山の中へ入って行って、雪の中でウイスキーをがぶ飲みして酔っ払って寝てしまった。それは自殺行為。マイナス20度まで下がるようなところですから、酔っ払って寝てしまうと、凍死してしまう。それを見込んでの行為だったんですね。

それを知った時に私は死ねなくなりました。先程読んでいただいた聖書にもありましたけども、全世界を儲けても自分の命を損したら何の得になるか、ていうんだ。命は非常に尊いものだ。それほど大事な命。それなのにウイスキーで酔っ払って死んでしまう。はかないです。その命のはかなさを知った時に死ねなくなりました。それで私はその後、教会で洗礼を受けて、教会の活動に加わるようになります。

その中で困ったのは、だんだんと園外の交流会に出て行けなくなったことでした。なぜかと言うと、自分の顔が自分が怖がった兄さんの顔と同じように歪んできた。醜くなってきた。それが恥ずかしくて、そういう会合に出られなくなった。毎朝顔を洗う度に自分の顔がどんな顔をしているかよくわかります。しかし、自分がこの顔を受けとらない限りは、人の前には出られない。私は悩みましたが、命の尊さがわかったなら、今の現実を受けとめるのが当然と思い決めました。命ってというのは生きることですよ？私は死ねなかった、自殺もできなかった。だから生きなきゃいかん。生きるからには自分のこの醜い顔を受けとめなければならない。自分で自分の顔を差別してきたんです。他人じゃないんです。自分が差別してきました。自分が命の大切さを知って、死ねないんだったらこれを受けとめないだめだ。自分が自分を差別してたのは間違い。自分の顔が悪いからといって、ひがむことはないんだ。太田國男は太田國男。私はこの体は命の器だと思ってるんです。器にはいろんなのがあります。だから器によってその命が左右されることはない、と私は思う。

誰かの命が大切で、皆さんの命は大切じゃないということがありますか？同じでしょ？

私達は同じ大切な命を持っている。誰がくれたんですか？自分で作ったんですか？そうじゃないでしょ？これは預かってるんですよ。強いて言えば天からいただいた。キリスト教の人は神様からもらったと言う。私達の知らないとんでもないところからいただいた命。その命は皆同じです。このことがわかった時に、そして自分のその今まで自分の顔を自分で差別してたことを恥ずかしく思いました。で、自分のこの顔がいとおしくなりました。こんな顔をいとおしく思うの私ぐらいだと思うんだけど、それでもいいんです。私一人でもファンがいりゃいいんです。ファンがいなかったら私は寂しい。自分で二役やっております（笑）。

私はあちこちを旅行します。海外にもずいぶん行きました。それを聞いた療養所の友達が、「太田さんはあの顔でずうずうしく飛び回ってて恥ずかしくないか」ってみんなが言ってる、って言うんだよ。偏見と差別はね、療養所の外の人たちが入所者を差別するんじゃないんですよ。療養所に入っている人達が差別しちゃうんだよ。差別はそんな遠いところにあるものじゃない。近くにある。私がいって私自身の中に差別がある。それを差別心と言う。これは難しいですよ。見えないですから。神様を見ることができないように、その差別心という自分の心は見ることができないですから、これは難しい問題だ。それぞれの心の中に差別心はある、ということです。ただそれは、私はあなたを差別してます。て、誰も言わないからわからないだけの話。そう思いませんか？

これから皆さん方は保育士ですか、人と付き合う仕事ですよ。そこで向き合う人の中にはいろいろな障害を持った人もいます。いろいろな人に出会おうと思います。障害を持っているから命を粗末にしていいいんですか？そうじゃないでしょ？あれは器ですから、器と中身を混同しないで。器で物事を判断してほしくない。器がどうであろうとその人が持っている器に入っている命が大切。自分が介護している人の命と、介護している側の方の命が同じだということ。忘れないでほしいと思うんです。そうすれば仲良く障害者と付き合うことができると思うんですね。

「柳城で学んだこと」 母親から見た保育

10月25日



卒業生(保護者会会長)
松原 あづささん

卒業してすぐ附属の幼児研究所に勤務しました。

1年目のとき主任先生に言われた言葉で、いまだに忘れられない、というより私の中で聖句のようになってしまっている言葉があります。園児を連れてお散歩に出かけるとき、「もし子どもの列にトラックが突っ込んできたらあなたが体を張って子どもを守りなさい」といわれました。1年目のわたしは、単純に、なるほど子どもを守るって体を張ることなんだと妙に納得したのですが、本当はそんな単純なことではないということを、後に母親になってから知りました。

子育てもひと段落したので、ずうずうしくふたたび保育士の道に踏み込むことになり、現在公立保育園に勤務しています。二度目の子育てをしているようでとても楽しく保育させていただけていますが、いまの保育園の現状、子どもたちの問題、家庭の問題さまざま考えさせられることはたくさんあります。この限られた中でどうやって保護者の方の要望をかなえていくか、試行錯誤の毎日です。いつも、保育を考える中で、基本にしていることは、柳城で学んだことです。相手を思いやる気持ち、感謝する心、ほんの小さな道端の自然を感じる心。どれをとってみても柳城の先生方から学んだことばかりです。幼稚園教諭を経験し3人の子どもを育てる中でいつも、心に留めていることがあります。

子どもと向き合うとき、また、誰かと向き合うとき相手は鏡だということ。子ども

が笑っているときは、自分も笑っているとき、自分に自信が無く不安なときは、子どもも不安な顔をしています。かわいいかわいい、良い子良い子と育てるとほんとうにそう見えてくるのが不思議です。親ばかりですね。保育園の子どもと同じでかわいいかわいいといっていると、本当にそう見えてきます。他の園を見学にいかせていただいたときも担任している子どもたちがだんぜんかわいく賢くみえたのも欲目でしょうか。

子どもはかわいいだけのものではありません。時にとても残酷で現実的です。素直すぎて、友達が傷つくことも悪気無く平気で言えます。そんなとき先生の対応一つで優しい心を養ったり、いじめに発展したりします。子どもは怖いです。親や教師のことを良く見ています。ふとした仕草や言葉などそっくりと思うことがよくあります。私たちの行動は常に、子どもたちから観察されていることを心に留めておきたいものです。あるお母さんの連絡ノートに書かれていた言葉がとても印象的でした。

「夕方、仕事の手を休め、ふと空をみました。Hはいまごろ何しているだろうかと思うと、切なくなりました。」

どのお母さんもこんな思いをしてお子さんを預けているのだなとおもうと子どもたちが愛おしく思えてなりません。ほとんどの「お母さん」にとって、子どもは宝物で愛おしい存在です。幼稚園または保育園に送り出した後も、子どもを思い、心も体も傷つくことなく無事に手元に帰ってくるそれが当たり前の毎日です。教師や保育士はその当たり前を壊さないよう注意深く慎重に保育しなければなりません。とても大変ですが、遣り甲斐もあります。いまさらながら子どもをよくみてひとりひとりの子と、きちんと向き合えるようになりたいと思っています

チャペルを10倍「楽しむ」法 (その2)

今回は、本学チャペルのステンドグラスについてご説明します。

そもそも、ステンドグラスというのはどういうものなのでしょうか？加工の仕方としては、さまざまな色のガラスを鉛製の型枠に合うように切り、溶接したものです。外側から光が差し込むと、枠が黒い輪郭線となり、美しいシルエットを浮かび上がらせます。地中海沿岸ではかなり古くからこの技術があったようですが、ヨーロッパでも5・6世紀からイタリアやフランスなどでステンドグラスが用いられていたことが知られています。

このステンドグラスで図柄を表現し始めたのは9世紀以降のこととされていますが、特にキリスト教美術の世界においては、12世紀のロマネスク時代の聖堂において取り入れられたのをきっかけに大きな広まりを見せ、13世紀のゴシック時代に頂点に達しました。17世紀以降、衰退した時代もありましたが、近年再び見直され、いろいろな教会の窓を飾っています。

本学チャペルのステンドグラスは、豊橋昇天教会信徒の岡田慶子さん製作のものです。マタイ教会創立50周年を記念して、ある信徒さんの寄付により2001年に製作され、チャペル（前号参照）内部の丸窓4枚に入れられました。聖書の四福音書を象徴するシンボルが一枚に一つずつ描かれています。このシンボルは、ヨハネの黙示録4：7「第一の生き物は獅子のようであり、第二の生き物は若い雄牛のようで、第三の生き物は人間のような顔を持ち、第四の生き物は空を飛ぶ鷲のようであった」に由来するものとされています。

今号は誌面の都合により以上です。ステンドグラス以外にも、お話ししたいことがまだまだありますので、次号以降も続くかも！？



マタイ：人（のような顔の生き物）



マルコ：獅子



ルカ：雄牛



ヨハネ：鷲



世界のクリスマスと絵本展

11月27日(月)～12月22日(金) 図書館及び歴史資料室



今年も、本学が所蔵している世界の絵本とクリスマスに関する聖家族の人形(クリブ)や装飾品を展示しています!もう、ご覧くださいましたか?展示品の中から、少しご紹介しましょう!!



図書館



歴史資料室

イタリアの降誕人形(クリッペ)

中世に盛んに造られ始めた聖家族の人形は、すでに8世紀にはローマの教会に存在したと言われていいます。これらの人形は、クリブ(英国)、クレーシュ(フランス)クリッペ(ドイツ・イタリア)、ベレン(スペイン)などと呼ばれ、教会や家庭などに置き、イエス・キリストの誕生を偲びます。馬小屋で誕生したと言い伝えられていますが、本当のところは分かりません。けれども、聖家族とともに、東方の占星術の学者たち(王様説もあります)、羊飼、羊や牛、駱駝、羊飼いと羊たち、そして、小さな小鳥や天使たちの人形が共に集い、降誕を祝う心がこの人形たちに託されるのです。小さいものはくるみの中に作られ(展示しています)、大きなものは等身大のものまであります。また、国や民族によって、それぞれの特徴が出てとても楽しいものです。写真のイタリアの人形は、今年入ったものです。ぜひ、歴史資料室をご覧ください!

クリスマス献金先

今年も、下記のところへ私たちの心を捧げたいと思います。特に、アジアの子どもたち、身近な中部地区で行われている働きを覚えて祈りましょう!!

- アジア地域の医療の働きを支援するため(アジア保健研修財団・その他)
- 国際子ども学校支援のため、全ての子どもが教育を受けることができるように(中部教区名古屋学生センター)
- 野宿生活者が寒い冬を乗り越えることができるように(笹島キリスト教連絡会)
- キリスト教主義の保育園・幼稚園の働きのため(キリスト教保育連盟・日本聖公会保育連盟・キュックリヒ記念財団)
- 目に障害のある方(岐阜アソシア)、障害を持つ子どもたちの支援のため(ひだまりの里)

2006年12月20日発行 第12号

発行所 名古屋柳城短期大学
名古屋市昭和区明月町2-54

編集兼
発行者 名古屋柳城短期大学 宗教委員会

印刷所 株式会社 丸和印刷



この印刷物は再生紙を使用しています。